

平成30年12月2日 第59号

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火 「孫子まで」

品川は大木戸のあたりに家があった。はるばるとやってきて、漸く江戸に着いたという安埋 心感と疲労からか、ここまでたどり着いて行き倒れになる人が少なくなかったという。彼女の祖父は、そういう人を見かけると貧しいながらもよく世話をした。近所でも評判だった。江戸も末のことである。一人娘の彼女は早く父を失い、母も晴れの婚礼にあわずに世を去った。苦労を重ねてきたが、いまは、四人の息子や娘、かわいい孫たちに囲まれ、なに不自由なく幸せな日々を送っている。「おじいさまのおかげです」それが彼女の口ぐせだ。祖父が、行き倒れの人たちを救っていたそうです。そ功德が孫の私にまわってきているのです。「とこの孫の私にまわってきていた始まった。よく解っているよ。息子たちは「また。孫子のことを考えてやるんだよ。めぐりめぐって返ってくるんだからね。」「死んだらあとはどうなっても……。生きていこうが花だ。という風潮もあるが、いま幸せを、遠い祖父の善行のおかげと感謝すると同時に、先々までの孫子のために今の行動を戒めてゆく。私はこれは、もう立派な悟りであると思う。」

一般的な考え方（武末十治男）

仏語では「悟り」という言葉は最高であると考えられるでしょうが、修行僧でもない一般人にはこれに変わる言葉としては、「真心」が一番大切な事ではないでしょうか？自分の身内だけではなく、他人にもまた、自然も周囲のすべてに感謝と親切な気持ちで接する心がけが、自他共に幸せをあたえる基になる事だと思います。